

令和6年度 神戸市 英語教育改善プラン

目標

言語活動を通じた指導やALTとの協同授業の推進を通して、自分のことや気持ちを臆せず話すことができる英語力の育成を目指す。

○第5・6学年において、授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている学校の割合（R5：43.3% ⇒ R6：50%）

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①授業中、50%以上、児童が英語で言語活動を行っている割合が増加
（R4:99.4%⇒R5:100%）
- ②「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標を設定している学校が増加
（R4:95.1%⇒R5:100%）
- ③「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の達成状況を把握している学校が増加
（R4:73.6%⇒R5:90.8%）

未だ改善が必要な点

- ①第5・6学年において、授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている学校の割合
（R4:34.0%⇒R5:43.3%）
- ②「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標を公表している学校が増加
（R4:36.8%⇒R5:84.0%）

2. 要因分析

- ①全ての外国語授業をALTと協同授業で実施して3年目となり、英語でのやり取り等の言語活動が定着してきた。
- ②③神戸市版「CAN-DOリスト」を作成し、全校にモデルを示した。それをもとに各校で自校化しながら取組を進めることで、活用が進んだ。
- ①言語材料に慣れ親しむための活動にかかる時間が多くなっていることが考えられる。
- ②「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標を達成状況の把握に活用してはいるが、児童と共有しながら活用することが進んでいない。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①言語活動を通じた指導の推進
言語活動の質を高めるため、小学校外国語教育夏季研修にて、言語活動を通じた指導の具体を示すとともに、模擬授業形式の演習を行う。
- ②③新教科書対応「CAN-DOリスト」への改訂推進
教科書が新しくなることに伴い、「CAN-DOリスト」の改訂をするため、新教科書対応の神戸市版「CAN-DOリスト」の作成を行う。外国語担当者会で、具体的な自校化の仕方を説明し、提出を求める。
- ①ALTとの協同授業の推進
全外国語活動・外国語科授業（低学年は年間5時間）をALTとの協同授業で実施。言語活動を充実させるため、小学校外国語教育夏季研修にて、言語活動の中心となるSmall Talkの研修を実施。教員とALTとの合同研修では、意見交換や協同授業づくりについて研修を実施し、チームティーチングについて研修を行う。中学校教員とも合同で研修することで、小中での接続を推進する。ALTを講師とする研修講座「先生のための英会話教室」を年間2回開催し、教員の英語力向上を図る。一定の英語力を有する小学校教師の新規採用数については、検討を重ねる。
- ②「CAN-DOリスト」の活用推進
「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の活用を促すため、外国語担当者会にて、児童との共有の仕方について具体を示す。

令和6年度 神戸市 英語教育改善プラン

目標

それぞれの英語力に応じて積極的に対話しようとする意欲を育むとともに、自分の考えや気持ちを適切に表現できる英語力の向上を目指す。

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合 (R5 : 54.1%⇒R6 : 60%)

○授業における、生徒の英語による言語活動時間の割合 (R5 : 72.0%⇒R6 : 75%)

1. 目標に対する現状

- ①CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得または有すると思われる生徒数が増加
(R4:51.1%⇒R5:54.1%)
- ②生徒の英語による言語活動時間の割合が改善
(R4:46.7%⇒R5:72.0%)
- ③スピーキングテスト及びライティングテスト等のパフォーマンステストの状況が改善
(R4:57.7%⇒R5:91.9%)
- ④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の設定状況が改善
(R4:52.4%⇒R5:100%)
- ⑤英語担当教師の英語力の状況が改善
(R4:38.0%⇒R5:52.1%)
- ⑥英語担当教師の英語使用状況が改善
(R4:38.2%⇒R5:70.7%)
- ⑦英語教育に関する小中連携の状況が改善
(R4:37.8%⇒R5:100%)

❶ R5全国学力・学習状況調査の教科の結果から、「書くこと」に関して課題が見られたため、引き改善の余地がある。
(R5正答率26.1% うち記述式15.0%)

2. 要因分析

- ①③特に「話すこと」に関するパフォーマンステストについて、CEFRに基づく評価規準を加えたものをパッケージ化し、各校で同一のテストを悉皆実施したことで、生徒の英語力を客観的に測る材料が増えたことが、各状況の改善につながったと考えられる。
- ④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標のモデルを提示し、各校で活用することを周知したため、設定状況が改善したと考えられる。
- ②⑤⑥「言語活動を通した指導」について各悉皆研修が地区別研究会等で多くの先生に周知したことで、授業の改善等につながったと考えられる。
- ⑦悉皆研修の中で小学校の取組を紹介し、小学校とのつながりを意識した授業づくりについて研修したことで、小中連携の状況が改善したと考えられる。
- ❶日常的な話題を読み、それについての考えとその理由を書くことや、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書くことに関する指導が十分に共通理解されておらず、日ごろから取り組めていないことが要因と考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①～⑦国際的な活躍の基盤となる英語力の育成
実践的なコミュニケーションの育成および異文化理解の深化の2つを重点項目とし、以下の5つの視点で本市の英語教育を進めていく。
 - (1) 生きた英語に触れて学ぶ機会の充実
⇒ALTを活用した神戸独自のプログラムの充実
 - (2) 伝え合う楽しさを実感できる授業の推進
⇒研修等において授業実践の好事例を周知
 - (3) 4技能5領域の達成状況の把握
⇒神戸市版CAN-DOリストの改訂（小中高連携）
⇒4技能型試験を市内10校で試行実施し、その取り組みの分析・検証を行い、授業改善を進める。
 - (4) 「話す力」の育成
⇒研修等において「話すこと」におけるパフォーマンステストの好事例を周知
 - (5) 教員の英語力及び指導力の向上
⇒指導の充実を目的とするワークショップ形式の研修の実施
- ⇒上記の取組について、専門家による検証委員会を設置し、全国学力・学習状況調査や各種事業の実績等を参考に、本市の英語教育の達成状況について検証を行う。
- ❶「書くこと」の指導の充実
神戸ならではの題材を作成し、CEFRに基づく評価規準を定めたパフォーマンステストとしてパッケージ化し、各校で実施する。

令和6年度 神戸市 英語教育改善プラン

目標

他者の考えや社会の情報を理解し、積極的に語り合ったり、国を超えた課題の解決策を考えたりすることができる英語力の向上を目指す。

- パフォーマンステスト（スピーキング・ライティング両方）実施率: 80%以上（R5：30.8% ⇒ R6：80%）
- CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合（R5：A2以上41.4%、B1以上27.9% ⇒ R6：A2以上45%、B1以上30%）

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が増加（R4:15.5%⇒R5:27.9%）
- ②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（%）が増加（R4:77.3%⇒R5:96.2%）
- ③「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況 公表（%）（R4:66.7%⇒R5:83.3%）

未だ改善が必要な点

- ①スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合（%）（R4:54.5%⇒R5:30.8%）
- ②CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（%）（R4:90.3%⇒R5:78.1%）
- ③英語担当教員の授業における英語使用状況（%）（R4:68.2%⇒R5:65.4%）

2. 要因分析

- ①において、コロナ禍後に国際交流（オンライン、対面）が再び活性化されたことで改善したと考えられる。
- ②③において、令和5年度夏の実践研修、および、令和5年9月策定英語教育の推進に関する取組方針が周知され、英語教育への目的意識が高まったことが考えられる。
- ① ③について、CAN-DOリストは各校で用意され、公表されているが、未だ活用されるところまで意識化されていないことが考えられる。
- ②について、ベテラン教員の退職と、新規採用教員の増加が1つの要因と考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- 令和5年9月策定の神戸市「英語教育の推進に関する取組方針」の以下の重点目標を具体化する。
- 1. 目標・重点項目
英語教育の目標及び目標達成のための重点項目を設定する。
目標：「国際的な活躍の基盤となる英語力の育成」
重点項目① 実践的なコミュニケーション能力の育成
重点項目② 異文化理解の深化
＜上記の重点目標のための具体的手段について＞
①「神戸市オリジナルCAN-DOリスト」作成プロジェクトの始動と推進。
※小中高の授業の連携を図る手段として、高校生が自らの興味・関心を深める探究活動の成果を基にしたアウトプットの場を英語の授業において設定していく。
※高校生が生き生きと自らの探究プロセスを英語で語る姿を、中学生、高校生のモデルとしていく。（市立高校の多様な特色を活かして）
②「CAN BE KOBEプロジェクト」の始動と推進。
※小中高の教員、およびALTが協働して「国際都市である神戸」において育てたい子どもたちの像について共通イメージを持ち、魅力的な授業モデルを構築していく。
※その結果、校種間のギャップを軽減させ、児童生徒理解に基づいた「ウェルビーイング」につながる英語教育実践をしていく。

神戸市教育委員会

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		55	38	55		60		65		70	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		20	27.9	30		35		40		45	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		85	96.2	100		100		100		100	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合（％）		70	30.8	70		75		80		85	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	80	83.3	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	83.3	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		90	78.1	90		95		95		100	
	⑥英語担当教員の授業における英語使用状況（％）		80	65.4	80		85		90		95	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		60	54.1	60		70		70		80	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		75	72	75		80		85		90	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合（％）		100	91.9	100		100		100		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	70	35.4	70		75		80		85	
		達成状況の把握（％）	80	61	80		85		90		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		50	52.1	55		60		60		60	
	⑥英語担当教員の授業における英語使用状況（％）		75	70.7	75		80		80		80	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	70	84	90		93		95		100	
		達成状況の把握（％）	80	91	93		95		97		100	